

野外博物館 合掌造り民家園へようこそ

白川郷の集落は、何世紀にもわたり他地域からほとんど孤立した、人里離れた山岳地帯に位置している。こうした孤立した環境に加え、雪深い気候と険しい地形が、合掌造りと呼ばれる急勾配の藁葺きの屋根が象徴する独自の生活様式を生み出した。

野外博物館 合掌造り民家園では、白川郷の典型的な本物の歴史的な家屋を見学することができる。白川郷の家屋のほとんどは個人所有で一般公開されておらず、外からしか見ることができないが、この博物館では合掌造りの家屋を内部まで見学することができる。見学者は内部を探索し、家屋がどのように建てられ、どのように使われていたかを学ぶことができる。何階層もの屋根裏部屋や、丁寧に形作られた茅葺きの軒など、この建築様式ならではのあらゆる特徴が見て取れる。内部には、伝統的な道具や家具、その他の工芸品も展示され、住人の生活様式を生き生きと伝えている。村人たちがどのように煙硝や絹を生産していたのか、周囲の環境を巧みに利用することで雪の多い冬をどのように乗り切っていたのか、などを知ることができる。

この博物館は、庄川に水力発電用のダムが建設されたことで多くの歴史的建造物が水没したことを機に合掌造りの家屋を保存するために設立された。また、1960年代には加須良（白川村の北部）などの過疎化が急速に進み、伝統的な家屋の多くが空き家になったことへの対応でもあった。その後、博物館には、神社、寺院、水車、蔵、納屋などの建物が追加され、さらに合掌造りの家屋も増えた。

現在、博物館にある9棟が岐阜県の重要文化財に指定されている。その中には、1750年代半ばに建てられた当館最古の合掌造り家屋である山下陽朗家住宅、1800年代後半に建てられたとされる合掌造りの典型的な家屋である東しな家住宅、さらに1909年に建てられた中央の大きな梁が特徴的な旧中野義盛家、同じく1800年代後半の家屋である、「ベンガラ」と呼ばれる伝統的な染料で塗られた畳の部屋の壁の赤紫色が特徴的な中野長治郎家などがある。

アクセスしやすいように各建造物は近くに配置されているが、博物館は伝統的な集落をイメージして設計されている。敷地内には、マンサクやトチノキなど、白川郷で古くから使われてきた低木や樹木が数多く植えられている。その他、ササユリ、リュウキンカなどの野生植物も植えられている。

館内にはそば処や休憩所もあり、よもぎ、栃の実、粟などを使った餅などのお菓子や、町民手作りのお土産も販売している。また、そば打ちや白川郷の伝統的なわら草履「あしなか」を編むワークショップにも参加することができる。